

Eldonas Kou WUKAI

1-6, 1-1307, Asahimaçi, Abeno, OSAKA.

N-ro

300号

La 1ade Januario de 1986a

大阪通信 向井 寿
大阪府阿倍野区大田町1-6, 1-1307 Tel 647-4089

続々 糾弾の思想 承前



「総括」とは……

「連節」と「伝達」

ところで「糾弾」の、特徴的なやり方として、かならず出てくるのが、「総括」としての「自己批判」の要求である。

だが糾弾者は総括とか自己批判を要求するだけで、どのような総括すればよいのか、自己批判はどうあるべきか、を、決して言うことはない。もともと自分に納得がいくなか、決まらずに、持っているわけでもなく、もちろん知つておかない。だが糾弾の立場に立っているだけだからである。

だから、被糾弾者がどのように応えようとも、その総括程度ではどうも満足できない。何かまだ足りない。どこか承知できんところがあるとして、更に糾弾を繰返すことになる。そしてもうこれ以上にもういふことがないというところでやつと終る。糾弾者に悪意はないのかもしれない。という以上、いわば大義名分をもつた善意で、それをやっていると思い込んでいるだけ、一そうしつこく収拾がつかない。結果としてそれは、被糾弾者をみせしめのために、その弱さやあやまちを絶対的にゆるさぬ立場で、ことごとく追いつめながら尚且直れ！という矛盾撞着もはなはだしいものになる。註⑧

註⑧ イオム21号でふれた「三菱爆発の死者に東京反自衛隊戦線の被らばどう責任をとるのか」というA君の質問は、別の言い方をすれば明らかに「総括」を要求している。そしてそれに對する池田さんの意見「この死者の問題をキツチリととらえ、このことの責任はやはり何くらが引受けていかねばならぬ」といつた言ひ方もまた、総括を自他に求めることにおいて、A君と同じ姿勢

むね

八八六家えと

例年どおり賀状又礼。このイオムでかわりにーと思つていてついつい発行がおくれてしまいました。おそまきながら、ことしもどうかよろしく。

向井 寿

▼ 昨年は何があつたかなァーと思つて、ぼつと降んだこと、(1) パウツ、念仏デモ、と、踏み絵びラ全集のパンフ二冊をつくつた。(2) タコヤキ団に加つて、名古屋・横浜東京へ。(3) 年末は表の会ハリスト、ついでに(金沢行動)久しぶりにやり甲斐のあることに参加した充足感。(4) そう、去年一月は「踏み絵びラ」で目が廻る忙しやで……。▼ ことしはーまず、パンフ(実践非暴力直接行動シリーズ)のつぎ二冊以上はつくりたい。イオムは二カ月一回位に……。

一月廿日 記

勢、同じ立場から出ているという気がする。

註⑨ 「糾弾」と「総括」の關係を圖式化する。

A 「糾弾」(↓)のやりかたとしての(↓)「総括」

B 「総括」(↓)のやりかたとしての(↓)「糾弾」

という往復相乗がある。

そしてその二つのものに通過して核心となるものは「闘争」の中の「闘争」の部分、失敗や欠陥のみに焦点をあてられ、(必ずあるべき)もうひとつの面としての評価できる部分(一例をば成功や美点について)すくなくともその二面を共にとり出して扱ふような視点が無い、という志向(或は特質)である。

▼ しかし、「ハウツーあらずけ」(イオム22号)で多少觸れたように、ぼくにとつて、いわゆる総括と叫ばれる作業の本来的べきかたは、このようなものではない。

ひとつの行動が「終わった」あとで、それがどういうことだったか振り返りかえつて確かめないまま放つておくこと、つまり「それで終り」としてしまふことは「一層々通例的に見られることだが」、「やつた」ことを「自己の上を通過していつた」というだけの「もの」に、始ごしてしまふだろう。

とすれば「終わった行動」を、次のステップとし教訓にかな、すくなくとも同じ職をくりかえすための「作業」に、ぼくが「あらずけ」と呼ぶ、いわゆる「総括」が当然必要とされねばならない。

つまり、通過してしまつたものを呼びかえし、自分の中に形をかえて受けとめ、つくり直すことで論理化し、方法化する。ことごとくしめくくる、その作業をも含めて、又そこで「行動」も「完結」したことになる。

さうならば「行動」(完結)させることによつて、それが次の行動へと、自分の内部で「連節」し、さらに「外部」へ「伝達」できるものとなる。その「連節」と「伝達」のために

の頁からつづく) せむなら、ごまかすにその批判が正当でも、それだけでは決して運動をつくり出さない。

それはかりかーたをば、気懸るに動くことで、思ひぬ居用をすまひ。ニングのおもしろうこのようないわば運動をいまいきとさせる「ダイナミズム」とも、未知の可能性への跳躍」ともいふべき「活力」を殺してしまふ。 それに

として代つて運動体をおおいはじめのから一きびしく容赦のない超論性・整合性・原則性と深刻率大主義、あり、直く息ぐるしく、身じろくも憚がられるよう、思想性の論理「からである。

「とすれば「運動評論」の意味として、「二つの運動のダイナミズムをすること、二つをききをとめることになつてしまふその否定的批判は、すくなくともその部分に対応する。」「もうひとつの実践的行動を批判に耐える具体的やりか」と共に提示する。

「その「裏面」つまり「合」が到底そのように容易に出せる者がないにしても、それを追及しようとしてもつくり出すこと、そんな最も困難な行動への現実的かわりか」を自分の責任とするところに、運動評論の意味がある。」

へ中途での論議の整理

「読みか之してみたら論議が一貫せず、脱線して

一体何をどうつもりやら」ということになりやうなもので、この中で、本来に立定る目的、問題点を単純化するところ①「糾弾の思想」をつくっているのは、運動の否定面頁の部分と、とくに明らかにするための総括と自己批判その徹底化と、そしてそのことを問うことがきびしければきびしいほど根本的原理原則に深く、よいとする姿勢(或は思想)である。

② その「糾弾の思想」の特徴を、より強者に論理としてあらわすものが、「運動評論」である。それが強調する「本質的原理的根本的思想性」にもとまづ「分析と批判」は、まず運動状況を否定的に向うことからはじまり、その総括と自己批判の要求に終る。「糾弾の論理の形式」を完壁化して、誰にも異論が出せぬものとして示すものとなつてゐる。

③ 「糾弾の思想」は運動のなかのあらゆる面に渗透してゐるとなつてよい。それは全く糾弾と無縁の思ひぬ部門にも潜在し、運動に大きな影響を及ぼしている。



たとえ「運動」のしんとさ、面白むく、固くるしと、形式的な率大主義、そしてそれを打ち破ろうとする、自由な思想、前例のない試みなど、たちまち封殺されてどうしようもない空気」といつたものとも、それは深いところをつながつてゐる。

④ 去うまでもなく、それが直接的な「糾弾」としてあらわれるとき、しばしば「権率の思想」となる。そして、「連合赤軍」や「×××救

援」などの例をあげるまでもなく、みるも無惨な結果、分裂・内ゲバ・組織も個人をも×タ×タにする破壊、ではない「山さな密室」?なら、周辺にあざらん無数!というほど転がっているだろう。改めてそのような眼で見まわしてみると、まさにある運動の周辺は死屍をいいとたつてよい。

はならぬのは、もうひとつの「糾弾」についてである。それは、これまで述べてきたものと全く異質の立場つまり被差別者・弱者の側からのものであつて、その「糾弾の特質」は、何よりも「やられたら、ゆりかえず」にあらわれている。(便宜上、運動糾弾を

前者被差別糾弾と後者とよぶことにする) その二つは「一見、「糾弾の論理も形式」もほとんど同じである。が、それを「全く異質」というのは、

① 前者は、「強者から弱者」、後者は「弱者から強者」という、立場の関係が逆である。② 前者の糾弾がその根柢とするのは、「自分の把持する原理ともいふべき思想」に致しての「思想的立場」である。後者は、去うならば、差別発言があつたという事実とその背景にある思想的社会的性に対する、自分の差別されている不條理の立場である。

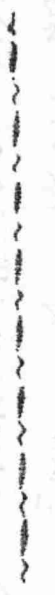
③ 前者の糾弾は、例えば今まで同じ席に坐つていた者を立たせて、被差別席へと区分すること、後者は、区分されぬまのまの席から立上つて、席を平等にならびか之させるために、ひっくりかえすことである。

④ 後者の糾弾の当然性は、(前者が証明なしに主張する原理の正当性、教義性と比べても)比べようもなく「絶対的」である。それが前者の糾弾もまた、後者同様に絶対的となるのは、「糾弾」ということばが、すぐ後者と結合し、その絶対性をひとしく想起させるからである。



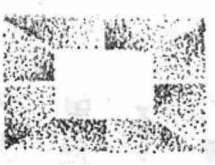
▼さて、このように運動状況が、誰の眼にも明らかに向
題点にもかかわらず、それが意識に昇らず、依然として
「糾弾の思想」が運動の至るところに潜在し、しかも人々
をくわんとしばっているのは何故か。

「運動理論」に見られる「糾弾の論理」が、いかにも
当座で首肯できるものであるにしても、それを現場に下
ろした結果としての現実が、みるも無惨に鬼切っている
のに、かまわりなく生きつづけているのは何故か。
そこで改めて出てくる問題は「いままで殆んど融れ
ることなく再三誣つてきた」「糾弾」総括を必然的に
要求し、それに大義名分を与える、へ原理くともいっ
べき思想、或はイデオロギーとは何かである。(未完)



▼この数字についているテーマ「現象と本質」へ糾
弾の思想は、多少決意して「ありさわりを憚らず
かへんことをもり出した」だが、つい歯切れが悪くなり
遅々として筆がすまぬ。年末年始半日以上かか
って、やつてこのまですべて「つ」始末。(「こす」こと大破
のは際ぐらだから、大山とちがつて、人の出入りや、
外出で、田舎がしばしば中断という言い訳もある)
そこでそろそろ「まごめ」に入らねばならぬのだが、
内容に変化をつけ多彩にするための、読者の中で意
見のある方に、「感想」という形の「手紙」で参加してもらっ
たことを思いついた。(「ハエー、イオムも三〇〇号かア」という
メッセージ代りに、「とそりかきに三〇三行でも、めつたに
音信のない方からのものが来たら、ほんま、とびあがつて、
ぼくはよろこびます」)

▼というわけで、まず掲出したのは、既に今日までに頂いた
比較的長文の手紙の感想。無断でしかも恣意的抄出の無礼
さながら寛容下さい。(順不同)



▼以前私は「H君もいっしょに救援活動を
やっています。その時、派の獄中にいる人が
ニーチエを読みたい差入れてくれというのをH
君たちが強く拒否し、ニーチエを読むなど敗北

主義で許すわけにいかぬ、それでも差入れるというなら
それは、派への干渉だと主張しました。私は大へん勝を立
て結局救援会を扱ってしまいました。今思うと、そのこ
き総括ができたかったのは、私自身「何が革命的か」をも
つばら向うていたからでした。そのごこの設問はすこし
変形して「何が進歩か」を問うようになりましたが、運
動に参加していたあいだじゅう、「弱み」はもらせない、
運動に害を及ぼしてはいけない、と自分に言いかけせるギョ
クツが日々でした。私の場合、「……命令されていることを
ホーがイヤない」とか、熱心に「運動をやっている人に水

をかけない」とかいう「脱履」になり、時にはそういう人
たちと「共同」(共犯)しないという消極性になりました。

これもみな形を変えた「糾弾の思想」であつ
たと思ひ当りました。...

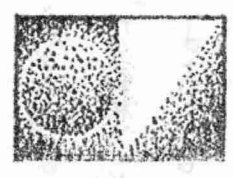


▼「糾弾の論理」を打ちつる人たちは、

「責任」について近代ブルジョアの
なぐ責任を負うのはつねに「近代
的個人」である、という考え方を
していると思われまふ。その考え
方で、たとえ戦争犯罪人を裁く
ので、個々の捕虜を殺したとか非
戦捕虜を殺した個人(の連)が「責
め」を負わされます。そしてそれら
はすべて「すべて」に為した行為に
についての責任です。(白鬼)
なかつた、等々)しかし現代の
「責任」は、発想を転換しなくて
はならぬのではないでしようか。
責任は「事」によって溯つてそ
の範囲が示される、と、そして、
何かを「為した」責任ではななくて、
何かを「為さなかつた」責任が、そ
の一群の範囲の人々に対して問われ
る、と。たとえ日中戦争とか南京
虐殺とかの「事件」は、そういう事件をお
こなない、おこなせぬというものが
できた一群の人々が、そのために為すべきことを為さなかつた
事件で、責め受らぬだと思われまふ。...

この責任は「為した」ことへの責任ではないので、罰せ
られるべきではありません。かれらに二度とそのようなこ
とを犯さぬ、これからはその為すべきで為さなかつたこと
をやる義務を負わせるだけです。...「糾弾」者は、その糾弾
によって「責め」られるべきなのではななくて、「論議」対立
分裂」を阻止しえなかつたこと、阻止のために何も「為さな
かつた」ことへの責任を負うべきだと思ひます。それが「そ
の」方法「やりかた」がオカシイ」「無自覚にされてきたその
「やりかた」がいま改めて仔細に見直されねばならぬ(「責任」
という)ことだと思ひました。...

いまさし迫つて解決が迫られている自然破壊や、日本の
アジア侵略といった「事」は、旧来の近代的責任論では全
員有責任(全員無責任)ということになりがちです。...「こ
もめ」らしく「糾弾の思想」では何事も解決できないのでは
ないか、と思ひます。... (N・J氏)



▼「糾弾の思想」にからまる、運動病は
確かにありますね。糾弾」といふとき「一



糾弾の思想 永前

— 10 頁よりつづく —

「相互攻撃」といふことを試みてみる。……でも積極的に使ったことがあります。……うっかりするとこれは、かなり欺瞞のない方になったり、高慢のない方になるかもしれない。相手が……君も……ちゃんのように立場がそれほど違わない人たちだったら……そう難しくないけれど、相手が……のように……なときにな、どうしても話合い的ふんいきにならないんですね。そのような相手を攻撃して味方にするとしたら、相手の在りかたを大きく変える以外にない。相手を別の人間にしてしまうことに近いことをやることになる。今の相手を否定するだけでなく、別の在りかたに変えようというのだから、本当は無理な話かも知れません。むしろ相手の肉体をほろぼした方が、ずっと優しいのかも知れないとさえ思います。ではなぜ糾弾するの……か？

一つには、こちら自身のため、そうすることによって相手の立場の根柢をより明らかにし、それに対して立ちこらうの在りかたの根柢を強め、深めること。

次に、まわりで見ている人々に対して、立場の選択の意味をよりはっきりさせること。

次に、相手について少しでも知ることによって、向いに役立てること。……まをこのくらいです。

▼ 向いとは、相手の物質的在りかたをせめるだけでなく、こちら側の中にも実はしみこんでいる様々な一面をばい差別観やシヤモ的ものの見方をものりこえてゆくものでなければならぬと思います。要するに、何が起っているのかを明らかにして問題をはっきりさせ、その問題をのりこえるために自分自身自身の弱さをもはっきりさせること、その場合に、答は始めからわかっているのではなく、向いの過程で見えてくるのだし、その答も、一人ひとりとして正しいものではなく、あくまで、今私たちがこう思う、こう行動する、という形のものだろうし、そうあるべきだろうと思っています。

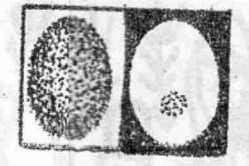
● 検査の思想によると、……そこで起きたことの一部だけを捉え、ある枠組に入らないものは見ようとしてもしない。……その事件にあらわれている問題については、もし見るとしても高みから、自分には関わりがないこととして評論し、その問題についての重荷を、もっぱらその問題の犠牲者、または事件を通して問題を明らかにしたものに肩あせようとする。またこれらについて判断する標準として、一人にとって正しいもの、とされる権威が持ち出され、検査自身の責任 問われない。……要するに相手と目の高さがはじめから違うのです。

▼ 差別糾弾の場合、アイヌが声をあげるとシヤモと目の高さを同じに……といってもおかしな話のわけで、シヤモ

の方がシヤモ総体としてマイヌを踏みつけている状況の中で、人としての心を痛め合えるようになる前には、くぐらなければならぬ門があるわけです。でもこの場合でも、もしシヤモの方がアイヌのいうことに対して、すべてごもつてもです、みだいな対応をするとしたら、それはむしろ逃げの一種であって……問題は何かの自分を自分で向い……から向い直すことを避けることではない。また糾弾するものの中にも当然弱さ、不十分さはあるわけですから……についてもふれないで身をかわすということになる。シヤモはシヤモとしての立場から負けんに声をあげ、時には激論する中で、また糾弾される中で、同じ目の高さに一歩でも近づけることができるのではないかと思います。

▼ 獄中者と救済者との意見対立についても、たしかに立っている場所の違いということがあります。……そこを批判の仕合ということは必要だと思えます。問題は批判をしようべきかどうかではなく、そのやりかたにあるのではないのでしょうか。検査の思想的なものがぶつくとしたら、それはなぜか。……どうしてそれをのりこえてならぬのか、……ということの問題だと思われ、検査的でない相互批判のやりかたを、実際……いろいろもつてゆかないといふ口ないのではないかと思います。

……獄中者は支援者に遠慮するし、支援者は獄中者を時には英雄扱い、時には問題扱いをしがちになる中で、相互批判をやることはたしかに難しいです。でも批判を二方的検査的論理的にならざるにゆる道はあると思われ、探らなければならぬと思っています。…… Y・Kさん



▼ ……「糾弾の思想」が「無意識下に沈んで」「見えぬ」「こころ」にたつて、運動を「何かの侵蝕」としてその体質や向性を左右するという指摘は重要なことだと思います。……運動には、すべて主体的であるために、自分の動機性への意識化という自己省察活動（その方法はさまざまですが）が欠かせない……キリスト教における「ダンゲ」とか牧師さんへの「説教」なども、仏教の「布薩」(自分の犯した罪を自ら僧侶の僧に告白)と「自恕」(他の僧から、自分の罪を指摘してもらう)の儀式や、マルクス・レーニン主義の党や団体でも「自己批判」、他者からの「批判」という形で、自己省察、他者からの自己省察など……

問題は、その方法とその方法に含まれる、心理学上で使われる意味での「抑圧」がある側面と、その内容が運動になるをもたらすかです。……責める目が周囲に多ければ多い程、責められない為の行動に傾き、それは必然的に以前やって責められなかった行動を繰り返す、ステロタイプの行動を多くしていくという、強迫行為的萎縮したものにたりますから……。……

……問題は相手に、誤りに気付かせ行動を改めてほしいとい

うことのために、そしてどうすれば誤りに気付く、行動を改めてくれるか？とやらなくては、その主題の実現、共有が難しいのに、ついつい「誤りへの感情的非難」と、その為理論的な衣服をつけた攻撃でその相手をやっつけ、責めることで相手を気付かせ、行動の改めを促させようとしているんです。そういうほくのあるほうが、親が子供を叱りつけて服従させるものと本質的に同じだっていうことに気付くまで時間がかりました。支配的で、責める根拠となる権威を暗黙の内に、自分の後盾にした態度だったんです。

(I・Hさん)



▼ Aさんは、人が自分自身にしか要求できないことを、他人に要求しているようにみえます。が、それをどうも仕方がないでしょう。向井さんの云うことは、根源的な批判にかかっています。「人権」についてどう考えるか、「一般」と異なっているからです。

…中流半端な整風をやると、「反・糾弾の思想」が専門家の陣ろろになつてしまします。「検査の思想」のバリエーションが数かぎりなく出てくると思います。

いま、Aさんに何と何というべきか。…実利で釣るとなるか…

① 敵の手中にある仲間を精神的にとり戻してから、再び確立された人間関係の中で批判を。でないとい味方を減らし運動にマイナス、「病い」をなまして人を救うのが大切。

② 個々の成員の主体性は試行錯誤をほらむが、それでも運動の進展に大切であるから、自由には意見を見逃さざる状況をつくるべきである。…となりますか。…ちなみに①②は私が大昔に勉強した毛沢東思想によるものです。

本当は何と言うべきか。根本的にはどうすべきか、私なりに考えたが、「お前ら、糾弾してるんが、救済してるんが」の一言に還元されてしまうので、結局のところ私には「わかりません」です。 (O・Mさん)



▼ 一見したとき、Aさんの言うことは、誰にも否定できない妥当性を持っているし、僕自身共感大に覚えました。…にいう向井・パクラされた際の自供の向壁がすくなくあつたからです。…に引つかり…読み返して…今はやはり、向井さんの指摘する糾弾の論理は排除の論理につながるというのが正しいように思います。…

それはこのことが向壁となる場合「基準」となるのは一自身の肉体(髪・生髪)を持つたない「共産主義的な向壁」であり、基準がどうである以上、一相互批判による総括という立場をとつていくも一当然糾弾という趣きを必然的に持たざるをえない…革新を自認する組織ほど、制度

などの大状況を変えようすることに急であつても、組織内外の人間関係の「ズミ」を変えようとは、この次でしよう。…仮にある問題…を論じる際の基準を、組織成員の間でより具体的なものとして出してい、なおかつ一定の了解事項として再指定しようとするのは、大変な時間と労力を要するし、共通事項として確認しようとするればする程、最大公約数としてしか出せなくなり、あまいすから抜け出せないのではないでしょうか。…

個別の問題に対して、ごまかす普遍性を対置するというやり方は、議論の中で、真実状態の所に吸い込まれるようなものであり、ある場合は救いどころがあるような、不思議な拘束力を持っているように思われます。(S・Mさん)



▼ …運動する人の殆どはある主張に共鳴し、感動したら、その熱い思いを無差別に伝えていると思つたのですが、その感動というものが…人によって全然ちがったところだらがったように感動しているというぐあい、大変様子がちがうのが事実なのです。が、まるで同じ感動と思ひこんでいることが多いものです。

もちろんこれを錯覚というのですが、この事実を錯覚としてお互いに認識されることはほとんどありません。…ともにスクラム組んで共通の敵と闘つていたはずの同志が、オレならこうする、ヤツもこうするにちがいないと思つていたり、ヤツはオレを売った…なんてことになつてしまつたから、絶望が大きくなる。

人はなぜ同志が同じ思いを同じように実現させようとしていると感じてしまつたのでしょうか。多分それは、人が同志の心を読む前に、同志にそうあつてほしいと感じているからなのだと思います。…

…親しい友達が自分をちがう「人権」だということを認めることはある面ではよく淋しいことですが、ほ入るうはいはん大切なことだと、ぼくは思つています。…そして向井さんが常に言うように、そこから出発し、たえずその人にとってなくてはならないのだと思います。…しかし、こういう前提で運動を組み立てている人は、自覚的明示的意識的によつていない人(おそろしく向井さんだけだ)と思つています。日本ではじめてだと思つています。全く特異です。

日本で月同じテーマについて同じ意見を持つ人が集つて何らかの集団的主張をする場合、無知から自覚への単純一直線の啓蒙しか、念頭にありません。山田実さんらが「平連」を始めたとき、あの雑種の愛護団体の中に、キミもボクもちがうけど、この三つのスローガンだけは同じだから一しよにやろうというので、大きな渦をまきおこすことが



「(2頁下よりつづく) 1でできたのですけれども、向井さんほどハッキリ「連合」の視点をはっきりさせることはできなかったのです。それどころが運動全体からすると例の雑種のところを積極的に評価する人など、ホンの一にぎりだけで、大多数はズブズブの野合主義と見ていました。」

統一か連合か―は「ずいぶん古いテーマですが、なぶ今日的なテーマです。ボクの方では、統一をいう人たちは口で何といおうと、土着的・ムニ的・日本的同族主義、絶対主義者であり、連合を言う人は民主主義者です。民主主義というのとは密着主義、相対主義であり、個人主義です。民主主義はお互いにちがう人の群をまとめるための方便ですが、前提はお互いにお互いちがうんだという認識を持つていて、そこにあるべきです。」

▼「死刑廃止運動」で「狼だらけ」の主義主張に一部同調は鳴るけれど、大部分は自分の考えとちがう。ちがうけどしかし役らぬ死刑にするのには反対です」という論理の組み立て方は、おそらく大多数の日本人にはなじみにくいのではないかと思えます。「民主主義的だか」ちがうならどうなるかとかめへんやないか、とつぶつぶとます。そして「ヤツラの方々に賛成でさんから署名しない。」(注)「たまたま」ラの方々に賛成と思われてしまうかもしれない」などと考えるのです。

▼「市民運動」というのは、本当は「ちがうけど」というところからはじまります。そして「じゃあ死刑反対運動に命をかけるか」と問われたら、「いや命まではかけんけど反対は反対や」という性質のもので、弱いといえは弱い、イイ加減といわれりやイイ加減ですが、市民たるものが命をかける対象は、他人の命だつて、世界の命だつて、正義の命だつてはしないのです。それもたまたま、ワレワレとはちがうていて、このひとつです。根性のある人もない人もいます。ある人もない人も反対は反対です。ない人に持てといつても持てないことを、ある人は知るべきです。努力して得られるものと得られないものがありま。それは、ちがうとして認めあうしありません。：：：
▼ WRIの仲間がきつと向井さんを、こーゆーとキーンする人ながらゆーなんていうに聞き流すときは聞き流すことを心得ていると取らぬです。でもちがうちがうところちがうふうの運動してきてる人には、コナンときてムキになつたりすることがあるのではありません。：：：
「左翼」運動というものは、指摘の通り「相互批判で育

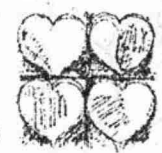
てあう」なんて迷信につかりきつていますから、「批判をシオンシに受けとめ、非あうば自己批判して前進」なんて考える雰囲気があります。批判の前提に信頼がなければ、いくら正しい助言でも人は決して受けつけません。糾弾にはじめから信頼はありませんから、やるだけムダ、つまり糾弾したいという糾弾者側のイカリや不満、優越感の発露にしかすぎません。：：：悪意を含んだ共闘は、腐った木で船をつくるようなものです。

運動をつづける必要が自分の中から湧いてきてきたのだからうちは、そういう悪意を含んだ声は、それは誤解だどととりあわず、馬耳東風と聞き流すべきだと思えます。：：：
Yさん



▼「糾弾」というのは、学校内では「叱る」ということです。「叱つてわかるような(子ども)が(事)なら、だまっててもわかっている。叱つてもわからないような(子ども)は、叱つても(怒つても)しようがない、ムダだと思いつつ、ますます悪くなると思いつつ、ついつい怒つてしまいます。そしてたびたびい学年一年生の頭をたたいてしまいます。」

司令部(頭)では考えでもないのに、末端部(手足)は感情にまかせて動くんです。
ぼくは、「救援」リ「ほめる」ことのみ正しいと思いましたが、いろんなやり方というか、いろんな人がいていいと思うのです。：：：
Mさん



▼「：：：イケニエにされる人間はたまりません。その人間はどうなつてもよい。：：：ほかのみんな多数の人間の幸せの善と正義をこのためにはその人間をツブシておまわらない。：：：」

：：：愛の面を対象化し、失敗から学ぶと、キレイなコトバでなつてるけれど、愛であつてはならない、失敗があつてはならない、弱くあつてはならない、そういう無様なハレンチな人間は、革命人間としては許されぬ。たとえは自由なんでもつてのほが、自己批判しろ、許さない!というのですね。そのようにして丸撃してツブスことによつて、他に教訓(道徳)を示すのですね。
▼ どういうふうにしたら、ソーカツしたことになる、



「(13頁からつづく) 自己批判したことになり、責任をとったことなるか、そのコタエはない。連赤の森恒夫氏がそうでした。コタエがないのです。そのコタエはみんなで見つけて作り出していくものだから。一人の人間がコトバで表現できるものでない。仮にできたとしても、だれも満足しません。と、自己批判要求は、無罪地獄になります。」



▼：紅弾者は被糾弾者を叩きつけるのに痛痒を感じていない。心が痛まない。…やっつけてやられた側がまればまいるほど元気がでる。…そういう関係です。これは警備と被疑者、検事と被告との関係に酷似しています。同じ側にはない。…

▼：検事警備は、犯罪の原因を犯罪者個人に求める。個人に100%押しつけて、そいつを獄に放り込んで、結局はみせしめとしてツブシてしまう。社会という人々の全体が、一個の犯罪者の犯罪(悪)を共有しているのだ、という認識はありません。…どうしても「責任」を個人に全部背負わせる仕組みになっていなければならぬ。だから彼らはデューティーに向費します。…向うに向うてトコトン進みます。向いつめること自体が正当性の証明かのように。…とにかく、先に向うたものが勝ちです。… (Nさん)

未完



あひまよて はばり〜

Kan Miki

▼「死せる孔明・生ける仲達を走らす」

「死せる孔明・生ける仲達を走らす」
「と。」「このしの正月はどうしてたへん」ときいてきたら、「うん、エー正月やったでエ。何もせえへん」ということを、「うったんや」と答えてケムにまこうと思つてたのに、誰もきいてくれへんの。というのはいオム読者から「去年はうっかり見逃したけど、ことし何かするなら、ぜひ…」とかいう趣旨のものが何度もあつて、それから一日朝受取つた年賀状の一枚に添えがきで、「大阪のアンタの友達、お正月に何もやれへんのか、と私服が訪ねてきました」と。

で、切商のご期待?…元日午前二時すぎ、腹ごなしがてら、く並みに、四天王寺、さんまで初詣といこかーというこで、ふらふらと出かけることにした。13階から4階の路を見下した処では、影がたちもなかつたのに、市大病院前でふりがさると、やっほり、それらしいのが二人、はなればなれでついてくる。二人はすぐいなくなつたが、もうひとりは、気付かれたと察してか、茶コートをぬいだロビロロになつて、寒そうに、遠くから…ずうつく…。つい、いつものクセで撒いてしまつて、マ、今日はサンボヤつてーと気付いて、それから、堂々、境内をぬっくり

一周して、「心寺。坂を下つて、合邦がけえんま堂」。そのそばのナントカ天満宮(まるまり人形なし。まるで山の中みたいな参道をドバツツで、「真田幸村戦死の地」の標石が建つてた)。新世界をとりぬけて、五時すぎ帰つてきた。…というだけの、たゞそれだけのこと。

▼「死せる孔明・生ける仲達」のイオム通信…

20号の題字をかいてから、この頃よく手伝わてくれる「マサ」が、とっせん「ハエー21年」とアキレタような大舌を出した。そうか、21年前、彼女は赤ん坊やつたわけだ。その年月の長さでなく、その歳月の、いわば肉体的変化?を前にして、ほくもアキレルほかない。そしてその変化をほくは、ほとんど20年一日、みたになつても、イオムつくり、に感じてこなかつた」ということは、それだけ変化がとり残されてる」と云うことでもあるだろう。

▼「発送用封筒をぬき出しながら、去年一年で目立って、新しい未知の読者がふえたナ。40人ぐらい?」と思つた。(例年せせい10人、20人が、踏み絵の事件や丸山尚平の著書「シロ」で、交換又は挨拶代りを除いた、いま(発送用封筒をぬき出しながら)味で秘密をいオム読者は、今号で89人。ほんやりした感じだ。内、15年以上の読者およそ20人、10年以上か入る、5年以上10人…といったところだろうか。何となく送っている交換やあいさつのものが、ついついふえて、すぐ50を越える。(時には物になったこともある)

▼「ところでイオムをつくって一方向的にこの21年向あちこちへ送ってきたことでの、オム一巻の懸念は、送付があつたけになつてゐるのでは?この印刷物の濫時代で、しかも恣意的な個人通信を「よんで下さい」とばかりに送りつけるのは、断るのを気兼ねな「無理・迷惑」になつてゐるのでは?」
ということ…

また(当分の勝負)しかし現実の実際問題として、労力や費用から去つて、全發送数がせいぜい三百返が理想。送り先をできるだけ「整理したい」ということがいつもある。

▼「で、いさなが躊躇しながら、今号に「アンケート」を同封した。もちろん、各項目へ記入の有無、或は「返送」の有無について、ごだわりなくご判断して下さいるよう」ということが前提である。

▼「20日(国務訴訟公判) 警備課補佐吉村某証人への反対尋問。H君Mさん、ほんまテレビ劇みてるみたいでオモシロかつた。吉村さんあまりのしどろもどろ、判事からも去われてカワイソいな位」と感想。次は、ほくくるり又ははんが証人に出る予定。心こころはいつもオム教人。こちらはほくくらも舎めて四々五人やけど、イロアアみんな、1月21日午記